

21

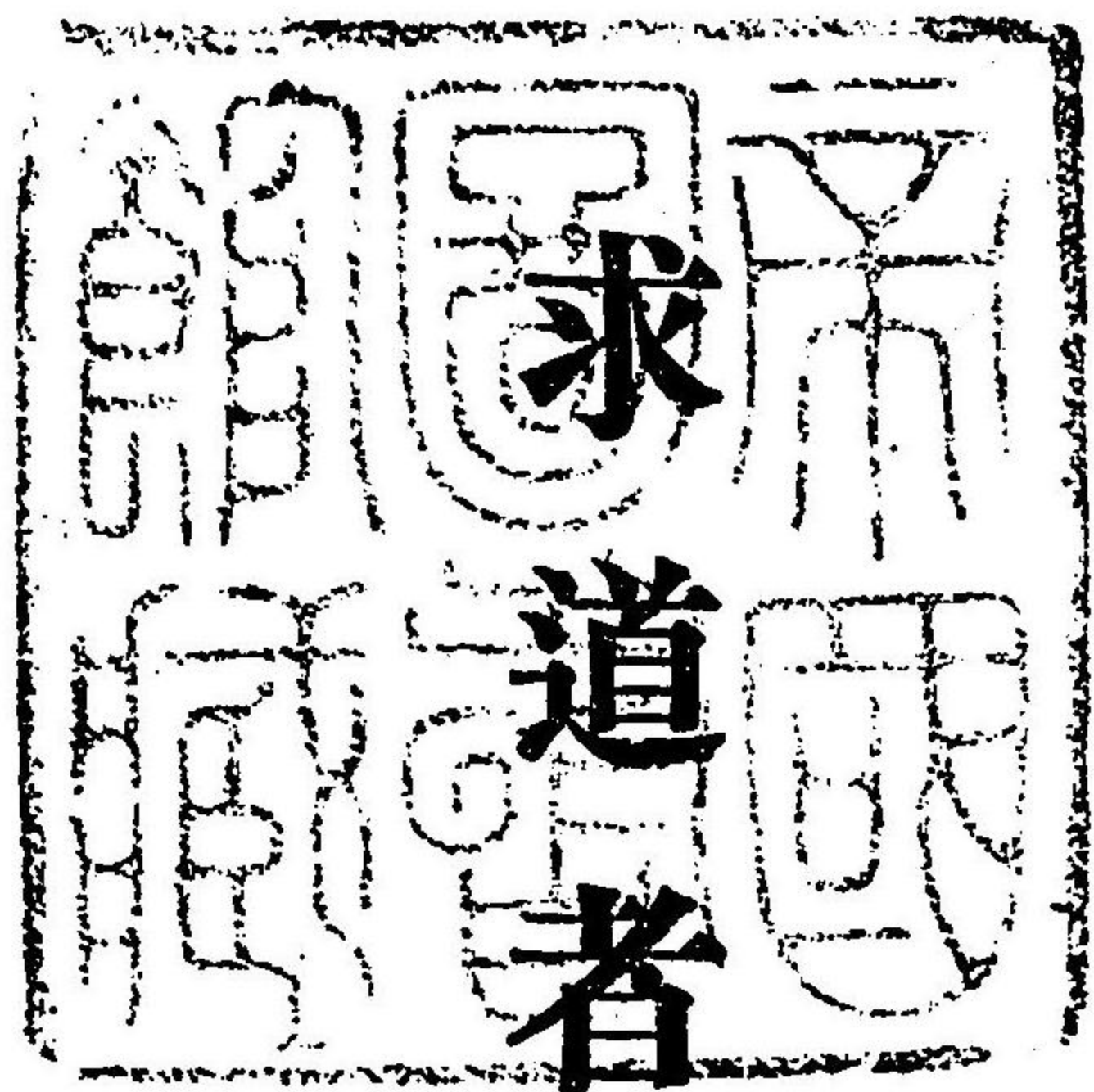
求道者に與ふる書

東京立教大學校長
ドクトル、オプ、フィロソフイ
元田作之進著

東京 警醒社書店

259
778

特 21
772



東京立教大学校長 元田作之進著

に與ふる書

東京 警醒社書店

明治
42 11 24
内交



序

本年ハプロテスタントの基督教が日本に来てより五十年目である。之を紀念する爲めに、プロテスタント、即ち普通に新教と稱する基督教の人々は聯合して去る十月五日より九日まで東京基督教青年會館に盛なる會合をした。又は各派の人々は其派其派に於て盛に傳道的運動をなして居る。従て本年は基督教を研究して見たいと思ふ人が大に増加した、是れ予が此書を認むるに至つた動機である。書の内容は予が平生求道者に話して居る事項であつて、別に新奇の議論を持ち出し

た譯ではない。求道者が基督教に入るの門とも思ふ所を陳べたのみである。求道者が之を讀て多少曉る所があれば予の幸福之れに過ぎないのである。

新教傳道開始第五十年の冬

西大久保 元田作之進

目次

- 一、 求道者の種類と要求、……………一頁
- 二、 求道者に對する希望、……………九頁
- 三、 宗教に三の要素がある、……………一八頁
- 四、 神とは如何なるものか、……………二八頁
- 五、 靈魂とは如何なるものか、……………三七頁
- 六、 未來とは如何なる意味か、……………四五頁
- 七、 基督の救とは何か、……………五六頁

求道者に與ふるの書

立教大學校長 元田作之進 著

一 求道者の種類と要求

諸君、諸君の中には官衙の職務に従事せらるゝ方もあらん、民間の實業に従事せらるゝ方もあらん、學生の生涯を送らるゝ方もあらん、或は定りたる業務なき方もあらん、如何なる境遇に居らるゝも、諸君を以て宗教を求めつゝある方として、予は此書を贈るのである、諸君、諸君の中には又種々の異りたる趣味を有して居らるゝであらう、或は詩歌的趣味に富んで、世の中の出來事を詩人の眼で解釋

せられんとする方もあるべく、或は冷かなる頭腦を有して、何も蚊も哲學者の立場より説明せられんとする方もあるべく、或は温かなる情緒ありて、何事にまれ感情の見地より判断せらるゝ方もあるべく、或は實際的才能に長して萬事其方面よりの解答を要求せらるゝ方もあるべきが、何の趣味、何の才能を有せらるゝも、均しく宗教を研究せんとを望まると諸君として、予は此書を認むるのである、諸君、諸君は種々の業務を有し、種々の趣味を有せらるゝのみならず、諸君の年齢も又た各異なるならん、少壯なる青年にして希望に富める方もあらん、人生の中途にありて、思慮に豊なるの時期にある方もあらん、或は老年にして老後の事を考つゝある方もあらん、男子の方も女子の方もあらんが、宗教は年齢を問はぬ、男女を撰ばぬ性質のものであるから、予は此書を認むるに當りて、それ等を念

頭に置かぬのである。

諸君、諸君は又宗教を研究する動機を異にして居らるゝであるよ、諸君の中には斯く思はるゝ方もあるよ、宗教は人生の事實であるゆへに、其如何なるものであるかと云ふことを知るの必要がある、學問の上から之を知るの必要がある、其利害とか眞偽とかは關する所ではなく、唯知る爲めに之を知らんと欲するのである、唯智識を満足せしむれば満足である、例へば人は八月十五夜の月を眺めて、是れは奇麗である、即ち美であると云ふ、他人も云へば、自分もかく思ふ、月を美とすることは人間一般の經驗である、そこで或る研究家は全般美とは如何なるものであらふ、客觀的のものであらうか、主觀的のものであらふか、何故に月を以て美と云ふのであるよ、月が美であらふと醜であるよと、利益問題には關係はないが、其理由を知

り度のである、知る爲めに知り度のである、かくの如き意味に於て宗教を研究して見たいと思はるゝ方もあらふ、予は此種類の人と語るを辭退しないのである、單純に智識を満足せしめんが爲めに宗教を研究せられて、差支ない、智識が満足したら、さてどうなると云ふことは今茲に御話しをする必要はない、それは後の事である。然し諸君よ、諸君は斯くの如き智識要求のみを有せらるゝ方斗りでもあるまい、諸君の中には國家の爲めとか、社會の爲めとか云ふ事を日夜忘れない方も多くあらふ、そこで宗教も此立場より研究し、佛教はどれだけ東洋の文明に貢献したか、基督教はどの程度まで西洋の文化を助けたか、或は宗教を信すれば、家族の平和にどんな影響を及ぼすであらふ、職工が眞面目に働くよふになるであらふか、小作人が忠實に餘米を入るゝよふになるであらふか、若し此等の事

に對して良結果を得るものとすれば、大に歓迎する必要がある、兎に角研究の價値があると、此種類の求道者もなきにしもあらずである、此等の求道者が諸君の中にとすれば、是れは眞理の爲めに研究するのではなくて、利益の爲めに研究せらるゝのである、即ち眞理探究者と云はんより利益探究者である、予は此等の人をも拒絶しない、此等の動機を以て研究せられて、目的以上の或ものを得らるゝであると思ふが、それは茲に述ぶる必要はない、唯此等の諸君に一言し置き度き事は、自分には宗教の必要はないが、家内には之を信ぜしめたいとか、下層の人には之を輸入したいとか、或は地主は兎も角も、小作人には是非願ひ度いとか、主人は後廻はしとして、職工には何分宜しくとか云ふ理屈は甚だ無理屈である、予は且那も妻君も、主人も僕婢も均しく研究せられんことを希望するので

ある、研究せられた上に於て、主人や地主に必要でないことを發見せられたらば、予は何の云ふ所もないのである。

諸君の中には更に新らしき動機を有して居らるゝ人があると、予は確信して居る。人には必ず或種類の煩悶がある、煩悶のなき人は白痴にあらずんば、聖人である、常識の全く缺乏せるものか、或は人生の極に通達せるものかである、予は諸君を以て固より白痴とは見ないが、又た聖人とは思はぬ、多少賢愚の別はあるが、常識を有する普通の方々と見て差支あるまい、夫れゆへに、予は諸君を以て煩悶の人と見るのである、諸君の中には先づ智識的の煩悶者があると云ふ事を予は豫言して憚らない、宇宙の事は中々復雜して居て之を知り盡くすことは容易の事でない、寧ろ不可能と云はねばならぬ、知れば知るほど、まだ知らぬことの多きことが分る、世の中の

事に通達したかの如く考へて居るは、研究心の足りないことを意味して居る、研究は一種の煩悶である、であるから、小學生より中學生の方が煩悶が多い、中學生よりも大學生は尙ほ多くの煩悶を持って居る、諸君は諸君の煩悶を科學に訴へた、科學は領分以外であると云ふ、之を哲學に訴へた、哲學は無言にして答ない、そこで諸君は之を宗教に求めんとして居らるゝのである、予が諸君に書き贈るのは諸君の此求道心に答へんが爲めである。

諸君の中には又社會的煩悶者があらう、社會の生存競争に苦心して居らるゝ方もあらふ、家族朋友の關係に就て心痛して居らるゝ方もあらふ、金満家は金満家の煩悶あり、貧民は貧民の煩悶を有して居る、而して諸君の煩悶に對して社會は冷酷に取扱ひ、親戚は之を對岸の火視し、朋友は去て顧みずと云ふが如き場合に居らるゝ人もあ

らう、又た諸君の中には疾病災難の爲めに煩悶して居らるゝ人もあらう、不治の症に罹り或は不具の災に陥るが如きは如何にも不幸の極みである、此等の逆境に於て諸君は宗教に其慰藉を求めらるゝは當然の事である、予は喜で此等の人に書き贈らんとするのである、然し諸君よ、諸君の中には更に深き煩悶を有て居らるゝ方がある、是れは秘密の煩悶である。諸君の中には親にも言はれぬ、友にも語られない苦痛が胸のどこかに蟠つて居る、是れが無かつたならば嘸氣樂であらふと思つて、扱これを無くすることが出来ぬ、業に就てもボンヤリとそれを考へて居る、床に入ても矢張り考へて眠られない、考へないと思つても矢張り考へる、自分で自分に愛相が盡さる様である、自殺は至て易き事であるが、世の物笑ひになるのは殘れる親や兄弟に濟まない、言ふにも言はれず、死ぬにも死なれず、

段々に瘦せ衰ふる斗りであるといふ有様である、親には單に神經衰弱と思はれ、朋友には過度の疲勞と云ふ様に斷ぜられて、轉地療養を勵めらるゝ、然し山も海も月も花も面白くない、唯鬱々として其日を送くるのみである、此窮境より救はれんが爲めに宗教を求めらる方もあらふ、宗教は必ず其等の人に慰安を與ふるに相違ないのであるから、予は大に歓迎したのである、諸君の中若し極度の煩悶に遭ひ給はゞ、最後の決心をする前に一度宗教に來られよ、諸君の憂は却て喜に變ずる事もあらん。

二 求道者に對する希望

求道者諸君、諸君は職業を異にし、趣味を異にし、年齢を異にし、又た道を求めらるゝ動機も同一でないことを知つて居る。而して

如何なる境遇に居らるゝも、如何なる趣味を有せらるゝも、又た如何なる動機で道を求めらるゝも、予は喜んで諸君と握手し、諸君と語ることとを希望することは前に述べた通りである。

かく諸君を歓迎し、諸君と宗教上の談話をなすに就ては、又た予が諸君に對する希望をも述べて、置かねばならぬ、無理な希望とは思はぬけれども、諸君に取ては、多少困難に感ぜらるゝかも知れぬ。しかし求道者たる諸君に對して、予の希望は、決して不條理とも思はなければ、不可能とも思はぬのである。

一、何事を研究するにも、研究者が一の偏見を以て、問題に臨むときは、其結果を得ることが甚だ遅いのである、是れは宗教問題に限らない、如何なる問題にても同様である、虚心平氣で研究すれば真理に到着することが早い、心に偏見あれば、先づ其偏見より取除く

の必要が生じて来る、然るに實際に於ては人に虚心平氣になれとは頗る困難なる注文であつて、餘程の修養がなければ六ヶ敷い様に思はるゝ、人は生れてより種々の話しを聞て居る、種々の書物を読で居る、又た種々の物を見て居る。自分にも、其聞いたり、見たり讀んだりしたことの感化を、どれ程受けて居るかを自覺しないかも知れぬ。しかしながら實は非常なる感化を受けて居るのであつて、其等の事が基礎となつて、知らず識らず、自己に一の偏見を養つて居る、宗教の事は特に此傾向を有して居る、佛教の事は別段自分で研究した事もないとして、幼少より見聞した事が自己の性質の一部を形成して居る、讀經を聞けば、其意味は分らぬにしても、何となく有りがたき感じがする、奥ゆかしき神社佛閣に至りては、又た何となく敬虔の念が起る、之れに反して、耶蘇教と云へば、何となら

氣味の悪い感じがする、何となく嫌な心持ちになる、別段其れに理由があるのではない、唯そういふ感念が起る、諸君は進んで求道せらるゝ位の方なれば、よもや基督教に悪感を有する様な事はあるべき筈なしであるが、しかし、諸君の心にも多少の偏見がないとも限られぬ、自らは氣が付かぬかも知れんが、實は人の心には偏見が随分多いのである、猶太人が基督を殺したのも此偏見の爲めであつた、佛教が印度より逐ひ出されたのも、印度人の偏見の爲めであつた、ふと思はれる。兎に角偏見は新らしき眞理を拒斥する力を持つて居る尤も偏見を有するものが、此れは偏見であると云ふことを知れば、之を捨つるに相違ないが、そふは思つて居らぬ、是れが正論であると考へて居る、斯くの如く自分で定めて居る考を根據として、眞理の批判者となる、こふなると、眞理を會得するに至ることは、不可

能ではないが、中々遅いのである、故に諸君が新らしき眞理を研究せらるゝには、成るべく心を空ふして研究せられんことを望むのである、此偏見の有無或は多寡に依て宗教を解釋するに遅速がある、是れが予が諸君に對する第一の希望である。

二、次に宗教問題は他の問題と違つて人生の安寧幸福に最も多き關係を有するものなれば、眞面目に研究して貫はなければならぬ。單に哲學問題であれば、宇宙萬物は唯現象であつて實在ではない、眞に存在するものは心のみである、山河草木、日月星辰、盡く心の迷ひであるとか考へても、又た世の中には物質より外になにもない、心とか靈魂とか、身體の外に何か存在する様に考へて居るのは間違ひである、凡て心理的現象は物質的に解釋する事が出来ると考へても、或は世の中には物質と心意の二元がある、相互に密接なる關係は有し

て居るが、しかし同一物ではない、かく考へても、人生の幸福に差程の影響は及ぼさない、一元論者であるから安心立命が出来る、二元論者であるから幸福なる生涯が送られると云ふ事はない、必竟するに此等は學問の争ひに留まらない、しかし諸君がもし唯物論者であつたならば、宗教の主張と到底相容ることが出来ないゆへ、諸君の幸不幸に影響を及ぼすべきであるが、此事は追々説明する機会があると思ふ、兎に角單に學問上の事ならば、之を知ると知らぬとに便不便はあるが宗教問題ほど直接に人生に關係はない。宗教問題は利益問題でもなければ、趣味問題でもなく、人生の根本問題であると予輩は信じて居る、己れを正しきものと思ふと、己れを罪人であると思ふとは、自分の身の上に非常な相違を生ずるのである、又た靈魂で不滅であると、ないとは、日常の心得に大なる

影響を來たすであらう、神が何時でも、又た何處にても、自分を保護し給ふことを信ずると、信ぜないとは、身の行ひ方に大變な懸隔を生ずるのである、諸君は未だ宗教を信じて居られぬが、もし信ぜられたらば、諸君の思想を一變する事になるのである、故に諸君に希望する所は、諸君が宗教的問題を眞面目に研究せられんことである、信ぜないうちは信ぜないで済むやうに思はるれども、之を信じたならば、信ぜない人は常に哀れむべきもの、様に見へるのである。

三、尙ほ又た諸君に注意し置き度き事は、宗教は科學以上である、哲學以上である、科學や哲學の領分以外に涉るのである、故に諸君が理性で解釋し得られないからと云つて、直に研究を中止するが如きは、宗教の研究に忠實なるものと云はれない。元來人間の理性は

極めて限られたる小範圍に於て働きつゝあるものなれば、其理性が満足しないとして、何事も非認するが如きは、眞理探究者の度量とは云はれない。殊に人間の經驗にないことは信ぜられないなど云ふものは、誠に狭量なる學者と云はねばならぬ。理性と經驗とか、如何にも立派なる語ではあるが、實は語のみにて、人は理性に解釋しないことを多く信じて居る、經驗しないことを多く信じて居る、世の中の大部分は信仰にて成り立つて居るのである。宗教問題は多く信仰問題である、しかし其信仰は理性に反するものでなくて、理性以上のものである、兎に角少しでも自分の慢心がありては宗教は分らぬ、自己の智識を以つて萬有を解剖し、自己の經驗を以つて宇宙の出來事を判断しよふなどは、以ての外のことである、故に諸君が今宗教の研究を求むるには、先づ自ら謙る心を養はれんことを希望す

るのである。

四、最後に宗教を研究するには多少勇氣がなければならぬ、我國は宗教自由の國であるから、何の宗教を研究するも、信仰するも、國安を害せざる限りは、自分の考へ通りになし得らるゝ譯であるが、しかし我國民が悉く斯の如き公平なる考へを持って居るかと云ふに、實際そふでないよふに見へる。地方などでは日曜學校の子供を苦める事もある、耶蘇教を信ずる教員を排斥する、或は家に耶蘇教信者が出來たら先祖に對して濟まぬ杯言ひ立て、邪宗門禁制時代の考を持つて居る頑固の家族もある、耶蘇教信徒の職業に對してポイコットをやる場所もなきにしもあらずである。であるから、諸君が求道者となりて基督教を研究せらるゝには或は家族中の或ものに反對を受けらるゝかも知れん、或は朋友や同僚間に受けが悪くなるかも知

知れん、或は商賈に影響を及ぼさぬにも限られない、東京や大阪などにては、かゝる心配はないが、地方の或る處はまだ三四十年前の風が吹いて居る様に思はるゝ處がある、諸君は斯くの如き事情の爲めに意氣沮喪するとなく、眞理探究者の精神を以て鋭意研究せられんことを望まざるを得ないのである。

三 宗教に三の要素がある

求道者諸君、予は諸君と基督教の事に就て語る前に、先づ宗教全般の事に就て語を順序であると思ふ。人間は元來宗教的動物である、何等かの宗教を有して居る、勿論稀れには宗教を信ぜないと云ふ人もなきにしもあらずであるが、是れは、境遇か、教育か、何かの爲めに妨げられて發達しないゆへならんと思はれる。元來宗教心がな

いのではない、宗教心が發生しないのである。良心を有せぬ人はないが、良心の働きを有せぬ人は間々あるのと同様である。如何なる人にも宗教心はあるに相違ないが、其發達の工合は同様でない、のびくと正當に生長するのもあれば、随分横道に走るものもある、臺灣の生蕃は人間の首獵を以て宗教の一部として居る。ブラマ教徒は早婚を以て宗教に必要と心得て居る。此等と今日文明人民の信奉して居る宗教とは實に雲泥の相違がある、ヘンリー、グレイと云ふ人は世界人民の宗教を斯分類して居る、天主教徒が一億九千五百萬人、新教徒が一億五十萬人、希臘教徒が八千五百萬人、マホメット教徒が一億六千五百萬人、猶太教徒が七百萬、佛教徒が三億六千萬人、其他の亞細亞人宗教が二億六千萬人、其他異教徒が二億五千萬人としてある、ステーション、イヤー、ブツクや、又

た日本語の地理書などにも各宗教信徒数の類別を擧げてあるが、いづれも其數字は精確のものと思ひることが出来ぬ。唯世界の人口十五億の大多數は宗教を信じて居る、而して世界の種屬は種屬として必ず何等かの宗教を信じて居ると云ふ事は明白であると思ふ。宗教の種類は色々異つて居るが、しかしながら何れの宗教も三種の性質を有つて居る。第一は人間以上の或者を認識して人は其支配を受けて居ると信じて居る。第二は人は肉體の外に靈的或者を有して居ると信じて居る。第三は人は此世限りの存在者でないと信じて居る。是れだけの事は孰れの宗教にもあるよふであるが、扱其内容の點に至ては大に異つて居る。諸君の注意を仰き度きは此點である。注意を缺くときは迷信となれば、妄信ともなる。人生の幸福を來たすべき宗教が却て人生の不幸を生ぜしむることゝもなる。

一、前に述べた通り、人は人間以上の或ものを信じて、自ら其支配を受けて居ると信じて居るが、扱其或ものとは何であるか、此點が即ち宗教の分かるゝ重なる點である、全體よりすれば、之を四種に分かつことが出来る、凡神教と一神教と二神教と多神教である。凡神教は、此宇宙萬有は即ち神の顯現であるとか或は神より迷ひ出でたものであるとか、云つて居る。一神教は此宇宙萬有は神ではな

い、神に造られたものであると云ふのである。二神教は世に二種の神がありて其支配の分領を異にして居ると云ふ。多神教は世に多くの神々がありて其力と管轄を異にし、分業的に人を支配して居ると云ふのである。

十七世の頃哲學家の泰斗として歐洲に其名を知られたスピノザは凡神論者の標本である。彼れは猶太教の人であつたが、凡神論を主張

するに至つて、終に破門せられ、眼鏡を磨きて生業としたと傳へられて居る。彼れは思想と延長とは唯一實體なる神の二屬性に外ならずと述べた。佛教も其理論の方面より見れば一種の凡神論と見て差支ない。其實際の方面より見るときは偶像教ともなり、多神教ともなるが、理論的佛教では、唯一實體的を主張するのであつて、第一種の宗教部に加へねばならぬ。

第二の一神教は猶太教と基督教と回教とに依つて代表せられて居る、猶太教の神は之をエルまたはヤウエと稱し、無上の力または無限の存在を意味する語であつて、無論唯一である。神が二つも三つもあるふとは無論想像しなかつたのである。基督教は猶太教より來つたものゆゑ、唯一の神を信ずる點に於ては同一である、しかし其異なる處は、猶太教の神は猶太人民の神であつたが、基督教の神は人類

一般の神となつた。又猶太教では未來のメシヤ即ち救主を信じて居たが、基督教は現實のメシヤ、即ち基督を信仰するのである。尙ほ又た猶太教のメシヤは政治的の救主を意味したが基督教のメシヤは心靈的の救主を意味するのである。基督教に就ては追々に諸君と詳しく語る考へなれば、茲に多く述ぶる必要はない、唯一の神を信ずる宗教であることを記憶して置けば夫れでよろしいのである。回教も又た猶太教の分身であるが、基督を唯一の救主であるとは信じない、一の預言者であると信じて居る。而して其創立者たるマホメットは更に大なる預言者であると信じて居る。とにかく唯一の神を認識する點に於ては三教共に同一である。

●予が二神教と云つたのは開祖ゾロアスターの立てたる波斯教を意味するのである。此宗教の特色は二種の神を信ずるのであつて、其

教義は大要次の如く云ふのである、宇宙萬有は二重體である、善惡二類に分かれて居る。善類は善造大主アフラマズダの造る所であつて、惡類は造惡大主アリーマンより成るのである。世界の歴史は此二大神争闘の歴史である。人間は全く受働的のものでない。アフラマズダの宣託を蒙りて、ザラサストラの啓示したる律法に従ひ、善神を扶け、惡神に逆ふ可きである。是れが人間の最大義務であるといつて居る。

●多神教を信ずるものは多い、前に述べたるもの、外は無神論者でなければ多神信者である。印度のブシマ教徒は創造者なる神と、保存者なる神を、破壊者なる神と、此三神體を信じて居る。希臘人は群神の主ジエス神と信じ、海神ポサイドン、日神アポロ、情慾の神アレス、火神ヘフェスタス、商業の神ハーメス等を信じ、又多くの

女神を信じて居た。羅馬人も亦た種々の神を信じて居たことは今日の歴史に残つて居る。北部シベリヤ邊に行はるゝ黄教と稱するものは、多くの鬼神ありて人間の吉凶禍福を主宰して居ると云ふ。中部アフリカ邊に行はるゝ拜物教は木石獸蛇を神として拜して居る。我國にても山の神あり、海の神あり、日も神として拜せられ、月も神として拜せられ、狐も神となり、犬も神となる、八百萬の神はないとしても、随分多くの神がある。我國民の多數は多神信者であると判断せねばならぬ。

斯くの如く、禮拜の目的は一定して居ないが、しかし何か人智の達しない、人力の及ばないものがありて、人間の安寧幸福に關係して居ると云ふことを皆信じて居る、宗教の要素は此處にあるので、予は逐て基督教の神は如何なるものであると云ふことを諸君に示さふ

と思ふのである。

二、次に人は肉體と共に靈魂の存在を信じて居る。是れも宗教の要素である。扱此靈魂は人間のどこにあるかと云ふに、腦の中にあると云ふ人もあれば、心臓か靈魂の所在地であると思ふ人もある。或ひは靈魂は靈的のものであるから、何處にあると指示することが出来ないと言く人もある。哲學者ラッブニツのごときは、人は無數の靈魂を有して居て身體の到るところに配置せられてあると論じて居る。茲に宗教の要素として考ふるのは靈魂が何處にあるとか、如何にしてあるとか云ふのでなくて、唯あると云ふことである。是れ丈は何れの宗教にも通じて居ると云はねばならぬ。又た肉體と靈魂の關係であるが、是にも種々なる意見がありて、希臘のプラトンなどは身體を以て靈魂の牢獄であると云つて居るが、基督教では身

體を以て神の宮殿であると説て居る、牢獄と宮殿、非常なる差異ではないか。或宗教では物質を以て全然悪しきものであると信じて居るから、靈魂の安きを圖るには物質より成り立つて居る身體を苦しめねばならぬ、即ち難行苦行を以て靈魂の救ひに最も必要なるものと信じて居る。此等の點に就ても追々基督教の立場を諸君に告ぐる事としよふ。

三、次には此靈魂は身體と共に滅さるものでない、死後にも尙ほ生存して居るのである。其生存情態に關しては宗教に依りて異なりて居る。佛教などでは随分細かに説いてある、輪回や涅槃の教理は佛教ばかりでない、プラマ教にもある。死後の靈魂が尙ほ生存せる人に交通する事が出来ると信じて居る人もある。基督教にて永生と稱してあるのは此靈魂の生存情態を意味してある。兎に角靈魂が身體

を離れて後、如何なる情態にあり如何なる活動をなすかと云ふ事は、各々教理を異にして居るが、身體は滅亡して後も靈魂は生存して居ると云ふことは共通の要素である。斯くの如く、人間以上の存在者を信ずること、身體の外に靈魂の存在を信ずること、此靈魂が死後にも存在すると云ふ事は宗教を通じての要素である。故に更に細かな教理を研究する前に此三點だけは信じて居らねばならぬ。

四 神とは如何なるものか

諸君、予は前項に於て、何れの宗教も人間以上の或者を認識して居る。人は肉體の外に靈魂を有して居ると信じて居る。又た人は此世限りの存在者でないと思つて居る。此三ヶ條は何れの宗教も信じて

居る所であると陳べた。此三ヶ條に就て其大要をも述べて置いた。今は進んで基督教は此等の點に就て如何に説くのであるかを諸君に語らんと欲するのである。

第一の點は人間以上の存在者である、即ち神の事であるが、基督教は神を如何なるものであると信じて居るか。

一、神は宇宙の最大原因である。是れが基督教の主張である、即ち物には原因がある、其原因にも又た原因がある、かくしていつまでも遡られる様に思はるれども、人間の思想がそふは許さぬ、原因に原因があれば、それは最早原因でなくて結果と云はなければならぬ、世の中は結果斗りであるとは云はれまい、原因がなければならぬ、而して其の原因は原因なき原因でなければならぬ、是れが即ち眞の原因である。眞の原因は最終最大の行きづまりであつて、其後に何

かあるふと云ふことを許さぬものである。即ち是れが神である。我々が原因を考ふるときは結果から遡るのであるが、聖書は哲學書ではないから、神を教ゆるのに、斯くの如き順序にて教へてない、寧ろ其順序を轉倒して、原因から結果を教へてある。神は萬物の創造者であると言ふのは此意味である、神が原因であつて、萬有は其結果である、どんな工合に神から萬物が産出されたか、直接創造か、漸次進化か、そんな問題は科學に問ふべきであつて、基督教では唯神は萬有の原因であると云ふ事を教ふるのみである。

二、神は萬有の維持者である。神は萬有の原因であると云ふのみにては所謂デイエズムと羅旬語で云ふのであつて、物足らぬ様に思はれる。宇宙を造て、之を放任して仕舞ふと云ふことは想像が出来ない。基督教はデイエズムでありてシエズムである、神は宇宙を支配

し、統治し給ふと云ふ信仰が必要である。世の中が若し進化法に依りて成立つものと假定すれば、神は其進化法に依りて現に世の中を支配し給ふ譯である。天の父の許しなくば一羽の雀も地に落つることないのである。全體此宇宙は一定の目的を有して動いて居る、盲目的に變化しつゝあるとは思はれぬ、凡てのものが、それ自身には意思がなくとも、或は意思を發表して居る。大隈伯の庭園は奇麗である、山も水も樹木も各其位置を得て居る、山や水や樹木に心があるとは思はれぬが、園主の心が此等のものを配置して居る、又た常に注意して居る、而して人に最も奇麗である様に思はるゝ事が其庭園構造の目的であつたに違ひない。宇宙萬有も其通りであつて、神の心が何れにも現れて居るのである。詩十九篇は其意味である。

三、神は靈である。萬物の原因であつて、且つ支配者である、神の

所謂御神體は鏡でもなければ、銅像でもなく、石や木で出来たものでもなく、又た寫真でもない。神は靈である。靈なるがゆへに目に見ること出来ない、耳にて聞くことも出来ない、手にて觸ることも出来ない、靈であるゆへに無形である、神が歩き給ふとか、語り給ふとか、顔を向け給ふとか云ふのは形容的である。靈的意味にて解釋せねばならぬ。又た神の理想とか眞理とか抽象的の觀念であるかの如く思はれては、基督教は迷惑である。理想でもあり、眞理でもあるが、しかし神は性格を有する實在者である。人間の有するが如き人格、寧ろ其人格の理想に達したるもの即ち神格と云ふものがある、即ち愛するとか、悲しむとかの感じがある。自己の目的を自由に實行する所の意思がある。故に靈なる神と云つたからとて、ポンヤリとした不得要領のもの、様に解釋すべきでない。或は幽靈

とか悪靈とか兎角人間界の禍となる如きものではない、神の性質は愛である、宇宙を統治するも、人間を指導するも、此愛の力である。神は恐ろしきものと思ふよりも有難きものと思はねばならぬ。四、神は一つである。右に述べた如く神は澤山あるのではない、唯一つである。此事を支配する神と彼事を支配する神と各々異つて居るとは多神教の人々の信ずる所であるが、基督教では同じ神であると云ふのである。前に神は宇宙萬有の最大原因であると云つたが、此最大原因が二つ以上あつては理屈は合はぬ、二つ以上あれば、夫れは最大原因でなくして、夫れ等の後に最大原因があることを豫想するのである。此れより以上のものは想像せられぬ、此より以外のものは思考せられぬと云ふものは唯一つでなければならぬ。今一つの理由は宇宙に於ける千羅萬象の現象は皆調和して居る、一致し

て居る、天體にも一定の法則があり、人事にも一定の極まりがあり、世の中の事は凡て一の意思から出て居るものと考へらるゝのである。尤も此一致調和が破壊せられんとする事もあり、又た實際に破壊せられて居る事もある。人世の苦痛とか罪惡とか云ふものは是れである。人生の目的は此調和の情態に復歸することであると云つて宜しい。兎に角宇宙の情態よりして神は唯一つであつて、一の意思の働きであることが分かる。

五、神は完全である。先づ神は其力に於て完全である、即ち全能である。如何なる事でも成し能はぬことはない、神の善良なる性格に適て居ることならば何でも出来るのである。自己の意思を自由に遂行することが出来る。次に神は何處にも同時にあることが出来る、あると云つても空氣が地球の周圍にあると云ふが如き意味に於てあ

るのではない、神は靈であるから、物質的に空間に存在するものではないことを忘れてはならぬ。神は何處にも働くことが出来るので、其力を制限し得るものは何もないことを意味するのである、故に神に祈るにはエルサレムに行く必要もないと教へてある。又た神は知らざる所なき神である。神に隠れて仕事は出来ぬ。神は過去も現在も未來も齊しく知る力がある。我々は經驗若しくは推測に依りて物を判断するのであるが、神は直覺するのである、他の方法に依りて間接に推知する譯でない。且つ又た神には變化と云ふものがない。時代に於て自己の性質や目的を變ずることはない。尤も時代と場合に依つて方法は異なるかも知れんが、自己の目的を變ずる様の事はないのである。

六、神は聖きものである。神は力に於て智識に於て完全なる如く、

道徳に於ても完全である。故に神は完全に聖きものである。自ら聖きものなるが故に凡てのものをして聖からしめんとするは神の意思である。「我れ潔ければ爾等も潔くすべし」とあるが如く、人類も己れの如く聖からしめんことは神の目的である。然るに罪惡は聖きことの反對であるから、神の目的を破壊すべき傾向を有するものである。それゆゑに神は己れの潔きことに忠なる爲め、又た人類の安全を圖る爲めには罪を罰せねばならぬ。然るに神は又た愛の神であるがゆゑに、人類を救ふことは其大なる目的である。潔きこと、愛とは兩立し難い様に思はるれども、それは不完全なる人間の經驗に依りて、かく感ぜらるるのであつて、完全なる聖潔の中に愛は含まれて居るものと云はねばならぬ。不完全なる人物の腦力にて完全なる神の屬性を考へるのであるから、兎角充分に納得の出來ない様に思

はるゝこともある。若し我々人間の有する腦力にて何も蚊も神の事が合點の行くものなれば、神は人間の位置に降つたものとならなければならぬ。分からぬ處に價値がある。漸々分かる様になるのが人間の進歩である。つまり神を人間に引き下げずして、人間を神に近かよらしむることにならねばならぬ。

五 靈魂とは如何なるものか

求道者諸君、宗教問題は靈魂問題である、身體の外に靈魂の存在を信じなければ宗教問題は初めより起る譯がない。若し人間の生命が身體の滅亡と共に無くなるものとすれば、人間は誠に墓なきものである、古今集の歌に

紅葉を風にまかせて見るよりも、はかなきものは命なりけり、

つゆをなどあだなる物とおもひけん我身も草にをかぬばかりぞ、
又た拾遺集の歌に

朝かほをなにはかなしと思ひけん人をも花はさこそみるらめ、
とありて、人間の生命を、風に吹き散らさるゝ紅葉の如く、或は朝
露や朝顔の様に譬である。基督教の經典の中にも、約百は人生を以
てその來ること花の如く、其馳ること影の如しと云つた。ダビデは
一夜の寢の如く、朝にはえいづる青草の如しと云つた。ヤコブは暫
く現はれて遂に消ゆる霧の如しと云つた。彼得は人の榮は草花の如
く、草は枯れ、その花は落と説いて居る。人生は實に短きものであ
る、昔より人生五十と云つてあるが、長くても百歳である、嘗に短
きのみでなく、實に又た弱いものであつて、昨日までは活氣満々の
青年が忽ちにして病床の人となり、昨年の今頃は互に親しく語りし

友が、今は既に地下の人である。共に樂しと思ひし間もなく、夫に
別れ、妻に別かるゝ實例は常に絶えないのである。身體の死亡が人
間の凡てを無くするものであるならば、人間は誠につまらぬものと
云はねばならぬ。長くつて百歳である、其中より病苦と心配と難儀
との年月を取除かば、残る年月はどの位であるよ。
然るに身體は人間の凡てでない。身體の外に靈魂がある。是れが基
督教の主張である。基督の語に、身を殺して魂を殺すこと能はざる
者を懼るゝ勿れ、唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ
とある、靈魂と身體二つあることがはつきりと示されてある。此靈
魂と身體とは如何なる關係を持つて居るか。
一、身體は靈魂活動の機關である。創世記第二章の七節に「エホバ
神、この塵を以て人を造り、生氣を其鼻に吹入たまへり、人即ち生

「靈となりぬ」とある、此語には形容が多い、しかし當時のイスラエル人民は具體的に物を考へた、思想の上より云へば餘程單純な國民であつたのである。故に土の塵とか、鼻に吹入れるとか、云はなくては分からなかつたであらう。兎に角其語の用ひ方は何であつても、人間の身體と靈魂とは同一のものでない、身體だけが靈魂がなくては、造り人形と同一であつて、何の活動もないものであると云ふ事は明白である、結局身體は靈魂の宮殿と見ても宜敷い、或は靈魂の用具だと考へても差支へない。如何に立派な身體であつても、之を指揮運轉する所の主人公がなければ、とんとつまらぬものである。

二、靈魂は身體と其實質を異にして居る。身體は物質である、其構造は如何にも巧妙であるが、身體だけでは思想もなければ觀念もない、物質が喜んだり悲んだりする事は想像が出来ない。物質は如何

に配合するも物質以外のものとはならぬ、物質は形體を持って居る、重量を持って居る、色や香を持って居る、形體は分解せらる、重量は増減する、色や香は無くなることもある。然るに靈魂は形がない、故に分解することは出来ぬ。一の靈魂を二つにも三つにも分拆する様なことは無論出来ないのである。靈魂は重量を持たないから、増加したとか、減少したとか云ふことは出来ない。又た靈魂の色を見たものはあるまい。靈魂の香を嗜いだものもあるまい。靈魂は物質でないから斯くの如き屬性を有して居らぬ。しかしながら靈魂は實在して居る、活動して居ると云ふ事實は疑はれぬのである。

三、どちらが貴い。道具よりも大工の方が貴い、家よりも主人公が大事である。その如く、身體よりも靈魂の方が人間に價値を與ふるものである。身體は不具であつても、病氣であつても、靈魂が健全

であれば人間としての價値は少しも下落しない。不具は不自由である、又た病氣は苦痛であるに違ひない、けれども必竟するに一時の事である。のみならず、靈魂がしつかりとして居れば、身體の不自由も容易に我慢が出来るし、病氣の苦痛も忍ばるのである。之れに反して、靈魂が腐敗して居る人なれば如何に健全なる、又た美しき身體を持って居ても人間としての價値は無くなつてしまふ。日本人に必要なのは大和體でなくて大和魂ではないか。

四、身體は、靈魂に必要である。靈魂の健全が第一であるゆへに、其健全を求むる爲には、場合に依りて其身體を犠牲に供せねばならぬ、生命を失ふものは之を得るとは此の事である、忠魂を有するものが討死をすることは誰れも知つて居る。然しながら、普通の場合に於ては、身體を大事にすることは靈魂を大事にする所以である。健全

なる靈魂は健全なる身體に屬するのである。彼の佛教やヒンヅ、教に於ける如く、無暗に身體を苦しめたりとて、必ずしもそれが靈魂を益するものでない。身體は神の宮殿と唱へられてある。故に健康を大切にすることは、基督教の精神である。自殺は罪であるが、不養生も罪と云はねばならぬ。

五、靈魂の望と身體の慾。靈魂の希望と身體の希望とを區別せねばならぬ。凡て眞なるもの、善なるもの、又た美なるものを追ひ求むることは靈魂に屬するのである。才能、智識、其他宗教道徳に關する高尚なる觀念は靈魂の所有物である。身體の希望とは身體の快樂安慰を目的とする凡ての慾望と云ふのであつて、財産、爵位、權力などは其手段として人の用ゐるものである。身體の慾望は皆悪いものとして斥くる事は出来ぬ。其善惡の判断は靈魂の爲めになるや否

やに依て定まるのである。財産に就て考へても其通りである、財産其ものに何の罪をも含で居らぬ。故に財産を望む事に道德上の是非は云はれぬのであるが、しかし之を望むのは財産其ものが目的であるまい。之を以て何をしようかと考へるのである、其考へ方が善悪の分かる所である。之を以て善い事を用ゐんとすれば、財産は善いものとなる。自己の肉慾の爲めに用ゐるん爲めならば、悪しきものとなる。此等の區別を明瞭にして置かねばならぬ。

六、靈魂の修養と身體の養生。其方法は相似て居るが、其資料が異つて居る。身體の發育に食物が必要である如く、靈魂の成長にも食物が必要である、唯食物がパンや米では役に立たぬ。肉は肉で養ふが、靈は靈で養はなければならぬ。即ち神の意識を自己の意識内に受け入れ、之れを消化して自己のものとするのである。身體に空

氣が必要である如く、靈魂にも空氣が必要である、靈魂の要する空氣は、聖靈と云ふのであつて、即ち神聖なる精神を常に呼吸することである。身體には運動が必要である如く、靈魂にも矢張り運動を要するのである、靈魂には手足がないから、其れを動かすことは出来ぬが、常に善事に活動せしむることは其運動法である、運動すれば自然に強くなるのは身體にも靈魂にも適用せらるゝ通則である。

六 未來とは如何なる意味か

諸君、未來があるか、ないか、と云ふ問題は、問題でない。如何となれば、未來を信ぜぬものはあるまい、過去があつた如く、未來もあるべしとは誰れしも疑はぬ所である。明日も未來であれば、來年も未來である、昨年があつた、今日はあるが、明日と云ふ日がある

だろふか、ないだろかなど疑ふものがあらふとは思はれぬ。昨朝太陽が出た如く、明日も太陽が出るだろふとは皆信じて居る。故に時間(かん)に於て未來(みらい)があるか、ないか、と云ふのが疑問(ぎもん)でない、前に述べた如く、身體(しんたい)の外に靈魂(れん)があるとすれば、其靈魂(そのれん)は身體(しんたい)の死(し)すると共に無くなるであらふか。身體(しんたい)が死(し)しても、靈魂(れん)は死(し)なぬのであるふか。死(し)なないものならば、どんな情態(じょうたい)に於てあるだらふか。此等(こゝろ)の問題(もんたい)を基督教(きりすと)はなんと解(と)くのであるか、これが即ち諸君(しよきん)と語(かた)らんと欲(ほつ)する點(てん)である。

一、靈魂(れん)と身體(しんたい)と同時に死(し)なない。諸君(しよきん)がなぜ死(し)なないかと問(と)ふなら、予(よ)は諸君(しよきん)になぜ死(し)ぬかと問(と)ふて見(み)たい。予(よ)が死(し)なない理由(りゆう)を述べよるよりも、諸君(しよきん)が死(し)ぬ理由(りゆう)を述(の)べる方が遙(はる)かに困難(こんなん)であるふ。全體(ぜんたい)世(よ)の中には無(な)くなるものは何(なに)もない。人(ひと)の身體(しんたい)も死(し)すると同時に腐(く)る

敗(ばい)し始(はじ)むる、終(つひ)には分(ぶん)析(せき)せられ、又(また)散(さん)亂(らん)するものであるが、其分(そのぶん)子(し)が一つとして無(な)くなつてはあらぬ。身體(しんたい)は物質(ぶつしつ)的(てき)で又(また)組織(そくし)的(てき)であるから、死(し)するときは其組織(そのそくし)が破(やぶ)れて仕舞(しま)ふのである。見(み)事に組(くみ)立てた器械(きぎ)が壞(こわ)れて仕舞(しま)うに役に立(た)たないのと同様(どうよう)である。然(しか)し其材料(そくざう)は無(な)くなつて居(ゐ)らぬ。唯(ただ)最早(さいそう)元(もと)の身體(しんたい)を組織(そくし)して居(ゐ)らぬから、其分(そのぶん)子(し)は何處(どこ)にどふなつて居(ゐ)るが充(じゆう)分に分(わ)からぬのである。元(もと)の形(かたち)で何時(いつ)までも墓(はか)に眠(ね)て居(ゐ)るものであるまい。然(しか)るに靈魂(れん)は身體(しんたい)の如(ごと)く物質(ぶつしつ)的(てき)でない、又(また)身體(しんたい)の如(ごと)き組織(そくし)を有(あ)して居(ゐ)るものでない。であるから分(ぶん)析(せき)せらるゝ事(こと)もなく、破(やぶ)壊(くわい)せらるゝ事(こと)もなく、身體(しんたい)と共にある時(とき)の如(ごと)く、身體(しんたい)を離(はな)れても、同一(どうい)の靈魂(れん)である。唯(ただ)身體(しんたい)と共にある時(とき)は其身體(そのしんたい)の爲(ため)に防(まも)り防(まも)られることがある。身(み)靈(れん)分(ぶん)離(り)の後(の)ちはそれがなくなるのであるから、活(くわつ)動(どう)の上(うへ)

に變化を生ずるのであるが、存在の上には變化を來たさぬのである。
二、死後、幸福の靈魂と苦痛の靈魂とがある。此世に於ける人間の靈魂、即ち身體と共にある時の靈魂の情態は我々に分つて居るが、未來に於ける人間の靈魂、即ち身體より離れた時の靈魂の情態は充分に分つて居らぬ。しかしながら、靈なる神との關係が一層深くなるに相違ない。身體より來る肉情の檢束を受けなくなるから、神を知覺するの力も一層強なると考ふことは正當である。言を換ゆれば、此世の靈魂より未來の靈魂は感じが強い。喜樂を感じることも強い。苦痛を感じることも強い。我々此世の人間は大なる喜を経験したことはない。富豪の樂みには苦痛が伴ふて居る、智識の樂があればとて精神的苦痛が無くならない。初子の生れるは喜ばしいが、之れを育てるには中々苦勞である。才子は兎角多病である。名譽と勢力に

は嫉妬や猜忌が附き纏ふのである。何の心配もなく、何の苦勞もなく、何の病氣もない生涯は随分想像せられぬ事でもないが、消極的に考へた斗りでは、眞の喜樂を説明し得たと云はれない。眞の喜樂は我々が楽しい、嬉れしい。愉快である、面白いと云ふ情態が無限に大なるものである。此の如き喜樂が未來にあると云ふ事は確た實であるが、其喜樂はどんなことであると云ふことは説明することが出来ない。苦痛の方も同様で、我々は大きな苦痛はどんなものか知らない。身を寸断にせられた時はどんな心持ちであらう、親子兄弟に一時に死別された時はどんな感じがするのであるか。ヨブの生涯は我々が知り得らるゝ丈の最も悲惨なる生涯であるが、是れが最大苦痛とは思はれぬ。最大喜樂と最大苦痛は此世の我々は知らない。未來に於て明かに之を知るであるか。知る斗りでない、どちらか我

靈魂の上に經驗するのである。之を思ふときは楽しい様にも感ぜらるゝが、又た恐ろしい様にも感ぜらるゝのである。

三、どんな靈魂が幸であるか。未來に於て我々の靈魂の中には、最大喜樂を得るものあれば、最大苦痛を得るものもあるとすれば何が故であるか。是れは因果應報である、善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果を結ぶ。此世に於ける人間の善惡は、未來に於て其の靈魂の上に應報が來るのである。此世の善人が實際に於て不幸不遇で如何にも氣の毒なことがある。此世の惡人が僥倖にして誠に幸福なる生涯を送れるものもある。人事凡て此世限りのものとすれば、此世は人間に對して誠に不公平である。が、人間は此限りでない。惡人が此世の短期間には僥倖なる快樂に耽れることもあらうが、油斷は大敵であるぞ、未來の大苦痛は彼等の靈魂の上に限りなく亂打

せらるゝである。此世の善人が不仕合せな生涯を送りて他人の目に氣の毒な事もあるが、未來の幸福は彼等の靈魂を待つゝある、忍耐が大事である。一時の苦痛と永遠の幸福とは比較にならぬ。

四、人生の善と惡とは、どふして分かる。善とは神の聖旨に副ふことであつて、惡とは其反對である。これが神の聖旨である、是れは聖旨でないとは又たどふして分かる、是れは自然界の法則でも分かるし良心の指導でも分かるし、一層明瞭なるは神の默示である。神が基督に依て其意思を明示し給ふたのである。是れが神が己れの意思を人間に通じ給ひし方法であつた。而して其善惡は人の凡てに就て考へねばならぬ、言語も行爲も動機も皆含んで居る。言語に偽りがあつてはならぬ、行爲に暗き處があつてはならぬ。動機が正しくな

くてはならぬ。是れ等が皆神の聖旨に適て居るものでなければならぬ。

ぬ。宗教上の善悪は外部斗でなく、心の状態にも關するものであるから、法網に罹らないでも、社會の制裁を受けなくても、父母の目に隠れて居ても、神には明かであるから、其制裁を脱することは出来ぬ。さらば人間の實際は如何と云ふに、法律上の罪人は無論の事であるが、精神的には皆悪人である。即ち罪人である。さすれば未來に於て皆罪業の應報を受けねばならぬ。未來に於て喜樂の靈魂は一つもない筈である。

五、悔改は過去の罪に對する責任を無くする。罪には其罪に對する責任がある。金を借りたるものは金を返す責任がある。國家の刑法に觸れたるものは、それ相當に罰を受けねばならぬ、精神的罪惡即ち靈魂が犯した罪は金で之を無くする事が出来ぬ、又た身體の處罰が必ずしも靈魂を救ふ事の出來る筈がない。如何に難行苦行をして

も、それだけでは役に立たぬ。靈的の罪は靈的の罰を受けねばならぬ。靈的の罰とは前に述べた通り靈魂の苦痛である。

此苦痛を免かるゝ一つの方法がある、即ち悔改めである。金を借りたものは悔いても返さなければならぬ、人を殺したものは、悔いても矢張り罰がある。世の中の法律は、悔改めが過去の罪業を無くせない、然るに心靈上の事は悔改めが過去の罪業に對する責任を免がるゝのである。心から悔いたりして、既に犯した罪が無くなるものではないが、其れに對しての責任を赦さるのである、罪を犯さないと同様に取扱はるのである。罪人が義とせらるゝとは此事である。放蕩息子が眞實に悔悟して父に詫たならば父は許さぬであるるか。神は父以上の父である、愛の父が人類の悔改を聞入れ給はぬ事はない。

六、悔改は未來に如何なる影響を及ぼすか。是れが必要なる問題である。悔改は過去の罪に對する責任を無くすると共に未來に於ける靈性の方向を決定するのである。如何に大なる罪人であつても、一朝悔改めて善人になれば、それが未來に於ける靈魂の幸福になるのである。之れに反して如何に善良なる生涯を送つても、一度墮落し其生涯を繼續すれば未來に於ける靈魂の苦痛となるのである。一日でも一時間でも最後に於ける悔改の生涯が何よりも肝要である。左すれば成るべく長く肉慾の生涯を送りて、死する前に一寸善人となりたいたと云ふ人もあるが。かく云ふ人は死する前になりても矢張悔改めない人である。悔改めは後程必らずするなど云はれるものではない。延期せらるべき性質のものでない。後に譲るとか延期するとか云ふ人は、悔改の必要を認めない人である、死する迄認めないで

あるふ。況んや此世の人生は何時死するか分からねのである。現在が悔改めの時であると考へねばならぬ。

七、悔改めは人生全部の悔改めでなければならぬ。虚言を吐くことは止めたが、人を打つことは止まないとか、酒食に耽けることは止めたが、偶像を拜する事は止めないとか云ふのは基督教の所謂悔改めでない。又た悪い事をしないと云ふ決心ばかりでなく、善い事をすると云ふ決心も必要である。悔改めは人心全部の改造である。新らしき生命に復活することである。何事に對する考へも新らしくならねばならぬ、人生の思想も日常の行爲も新らしき意味を有すべきである。一部の悔改めも無論必要であるが、全部の悔改めは更に必要なのである。

八、斯の如き悔改めがどうして出来る。處が人間は眞の神を知らな

い、自分の罪をも自覚しない、自覚しても悔改むる必要と勇氣を持たない、神が自分に對して如何に嚴格であるか、又た自分を如何ほどまで愛し給ふかを知らない、此儘に放任して置けば、悉く罪過の責任を負ふものとならねばならぬ。基督は此等の道理を能く人に教へられた。又た此等の道理を能く人に感ぜしめられた、其爲めに十字架の死をさへ厭はなかつた。基督がなかつたならば、人は其罪を悔改むるに至らなかつた。悔改めなければ、救はれる事が出来なかつた。それで基督は人間の救主である。基督の力に依て人の靈魂は天國の樂を受くる事が出来る様になつた。

七 基督の救ひとは何か

求道者諸君、諸君は外國の宣教師や日本の牧師より、基督は人間を

其罪より救ひ給ふたと云ふことを御聞きになつたであらう。人間を其罪より救ひ給ふことが出来たと云ふと、人間の受くべき罰を自ら十字架に掛つて受け給ふたからと説明したのであらう。其通りである其れに違ひない、予も矢張り同じ様に御答をするのであるが。しかし諸君、諸君は其れ丈の説明では、何だか分つたような、又た分らぬよふな心持ちがするのであらう、尤である、諸君は今少し其理由を聞き度いに相違ない。單純な頭腦で込み入つた理屈は聞きたくないと思ふ人は、其れにて宜しい、何も理屈が分からねば安心立命が出来ぬと云ふ譯のものでもない。又た感情一天張りで唯有がたがる人もあるが、これでも別に差支ない。何も信者になるには神學者にならねばならぬと云ふ筈はない。しかし、日本人に取ては基督教は耳新らしい宗教である、幼少の時から父母に教へ込まれた宗教で

ない。だから、求道者諸君の多數が其理屈を知りたいと思はるゝのは決して無理でない、諸君は感情を満足せしむると共に理性をも満足せしめたい、心の満足と共に頭の満足をも希望せらるゝに違ひない。手は諸君をかく解釋したから、基督の救ひとは何を意味するかを諸君に書き見て見る氣になつたのである。

一、聖書には何と書いてある。基督教の教は聖書の教へである。聖書に何と書いてある、これが第一に知つて置ねばならぬ事である。馬可傳十章四十五節に人の子の來るは「あほくの人に代り、其命を予て贖とならん爲なり」とある。同十四章二十四節に、基督自身の語として「此は新約の我血にして衆の人の爲めに流す所のもの也」と書いてある。約翰傳一章二十九節に「ヨハネ、イエスの己れに來るを見て曰けるは世の罪を任ふ神の羊を觀よ」と記してある。羅馬書五

章十節に保羅は「われら敵たりし時に、其子の死によりて神に和ぐことを得たり」と云つた。彼得前書一章十九節に、人の贖はれたるは「疵なく、汚なき羊の如きキリストの寶血に由る」と述べてある。此外同様の語句は澤山ある。此等の章句を概括して其意味を云へば、基督は人の爲めに死し給ふた、基督は人を贖ひ給ふた、基督は人を神に和らぎ給ふた、基督は挽回の供物となり給ふた、基督は人の爲めに血を流し給ふたといふのである。

二、古代より基督の救ひにつき、どういふ説明をした。右に述べた章句に依れば、基督の十字架に死給ふたことが、人間の救ひとなつた。基督の死と人間の救ひとの間に密着な關係がある。是れは明白な教であるが、扱基督が死給へば、夫れがどうして人間の救ひとなるか、其説明は聖書に與へてない。で、昔より學者が、それは斯ふである

ふ、そふであるふと多くの説明をなした、即ち多くの神學者が出來たのである。古代の基督教徒は斯ふ考へた、人類は悪魔の奴隷である、悪魔は中々強いもので、人類を唯では解放しない、そこで基督は悪魔に身請金を拂つて人類を救ひ給ふた、十字架上の基督は悪魔に與へた身請金であると思つた。後になつて、其解釋法が變つて來た、人類は神に服従の義務がある、神に譽を歸すべき義務がある、而して人類は其義務を盡して居らぬ、神に返すべきものを返して居らぬ、神に借りがある、故に基督が其罪なき生を獻けて人類の借財を神に拂ひ給ふたと考へた。即ち以前基督が悪魔に生を獻げ給ふたと思つたものが、後に神に獻げ給ふたと云ふ考になつた。或は人は罪を犯した結果として罰を受くべきものなるが、神は基督を罰して人を赦し給ふたと云つた人もある。或は基督が人間の代りに苦死

し給ふたのは、人間をして罪なるもの、如何に悪しきかを知らしめん爲めであつたと説いたものもある。
三、此等の説明に不十分な處がある。此等の説明の外に又色々と解釋を加へたものがあつたが、合點の出來る處もあれば、出來ぬ處もある。神が人類の爲めとは云ひながら、罪なき基督を罰し給ふたとは、どふも考へられぬ。罪なきものを赦さん爲めに罪なきものを罰し給ふは神の性質であるまい。全體聖書の語を其文字通に解釋しよふと思ふなら種々な困難が起つて來るのである。基督が罪を贖ひ給ふたとか、償ひ給ふたとか云ふのは、基督が人類を罪と其結果より救ひ出さんが爲めになし給ひし大なる犠牲を意味するに外ならないのである。又た宥めとか和らぎとか云ふのは、神の怒を鎮めると云ふ意味でない、基督の生涯と犠牲が人の心にしみじみと感ぜられた

なら、人は眞に悔い改めて神に服従する様になり、從來罪の爲めに人と神との間に城壁ありしものが取り拂はるゝに至るのである。神は此世を憎み給はない、愛し給ふのである。其獨子を此世に遣はすに至つた程、世を憎み給ふのでない、世を愛し給ふたのである。四、基督の死は何の意味か。歴史上から云つたら、基督の死は自然の出来事であつたと云ふの外はない。此世に生存し給ふた生涯の終點であつた。しかし基督の一生涯に目立て勇ましく見ゆるは、基督は如何なる事にても又如何なる場所にてても全然神の聖旨に服従し給ふたと云ふ事である。普通の人間が逆も及ぶ所でなかつた、社會は力を極て基督を私利私慾に陥れんと努めた、基督の有し給ひし人生は又た種々の誘惑を起さしめた。基督をして神より離れしめんとする機關はチャント備つて居つた。處が社會の惡徳も人情の弱點も、

とよとふ基督に向て成功しなかつた。基督の生涯は矢張り全然神の意思と一致した生涯であつた。斯くの如く社會の罪惡と調和せざる生涯は社會がだまつて生かして置かぬ、基督が十字架に苦死し給ふたのは必然の結果であつたのであるから、基督の十字架は、人の側から云へば、極惡無道の殺人罪を表はして居る、基督の側から云へば、義生涯の最高であつた、神の意思に服従したる最高の行爲であつた。かく見るときは基督の死は正義の完全に現はれたものとせねばならぬ。神との一致が充分に成し遂られたものと見ねばならぬ。人間の罪惡が宣言されたものと考ねばならぬ。五、基督は人間の受くべき罰を自ら感じ給ふた。と云つた斗りでは諸君には分るまい。全體罪なき基督がどふして神の罰を受けて死なねばならなかつた。神が罪人の代りに罪なき基督を罰し給ふたと

は思はれない、世間の事から考へても、犯罪人を赦す爲めに善良なる市民を罰すると云ふ譯はない。道德上の矛盾である。しかしながら、犯罪人の爲めに其父母や妻子が非常に苦しむと云ふ事は世間に随分多い、放蕩息子は其放蕩せる間は別段自分の罪業を感ぜないかも知れんが、其親の心痛と云ふものは名状すべからずである。息子よりか親の方が恥を感じて居る。人に對して面目もないと云つて恥入るのは却て親である。親が善人であれば、ある程、そふ云ふ感じを持つのである。基督は親以上の愛心を人類に對して持て居らるのである、故に人類の罪に對しては親以上の心痛を感ぜられた。人類は放蕩息子の如く自分には深く恥入て居らぬが、親以上の基督は言ふに云はれぬ程胸を痛めて居らるのである。基督は十字架の苦痛を以て自分の罰とは思はれなかつたが、人類の罪惡に對する羞恥

の重荷を負はれたのである。
六、基督の此苦痛がどふして人間の救となる。直ぐに救ひとはならない、救ひとなる前に條件がある。親がいくら放蕩息子の事に心を痛めても、息子が呑氣で居るならば、其放蕩より救ひ出され様がない、然るに如何に放蕩でも、親がかほど迄自分の爲めに苦んで呉れるか、自分の爲めに祈て呉れるか、自分の罪の爲めに斯くの如き最後を遂げて呉れたかと眞に感じたならば、其子の生涯に變化は起るまいか、人が充分に基督が苦しみ給ふた意味、十字架にまで人の爲めに懸けられ給ふた意味を知つたならば、自ら心を痛めずに居られよふか、是れが即ち信仰と悔改である。基督を信ずるとは此事である、罪を悔改むるとは此事である、基督の十字架の下に平伏して基督の精神を推察して、始めて人間の罪の大なることも、神が其罪

を非認し給ふことも、人に悔改めを要求し給ふ事も、又た神が人を救はんと思し給ふ事も分かるのである。分かるのみでない、實に悔改むる様になる。そこで又た救はるゝ事になる。して見ると基督が十字架に死し給ひしことが人間の救ひとなるではないか。七、基督の十字架は神の愛の實現せられた一の方法である。神は世の始めより人類を愛し給ふのであつて、一瞬間も人類を愛し給はなくなつたことはない。其愛は昔も今も何時までも變はらないのである。其愛は種々の方面に於て現はれて居るが、基督の十字架は尤もよく其愛を示したのである。假りに人類が罪を犯さないでも、基督は降誕し給ふたかも知れん、それは神の聖旨にあることであるから、人には分からんけれども、そふ考へても別に悪いことになかるふと思ふ。然し實際人類は罪あるものであるから、最も深き意味に於て

人に同情同感を有し給ふ基督は十字架の上にて人類の爲めに供物となり、茲に人間の靈的生涯に新紀元を開き給ふたのである。

求道者に與ふる書終

明治四十二年十一月十九日印刷
明治四十二年十一月廿二日發行

○定價十錢

不許
複製

著者 元田作之進
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者 福永文之助
東京市京橋區日吉町四番地
印刷者 渡邊為藏
東京市京橋區日吉町十番地
印刷所 民友社印刷部

發兌

東京市京橋區尾張町
二丁目十五番地

警醒社書店

電話新橋一五八七
振替東京五五三

コロンビヤ大學教授ギヂングス博士原著
立教大學校長元田作之進先生校閱
警醒社書店編輯部譯

社會學

定價一圓卅錢
小包十二錢

本書は社會學の大家ギヂングス博士が同大學生の爲めに講述したるエレメンツ、オブ、ソシオロヂーを譯したる者なり本書の校閱者元田先生嘗て同大學に於て親しくギ博士に就て社會學を專攻し其該博なる知識と獨創の學才に敬服し夙に先生は社會學上の意見を我國に紹介せんとするの素志を有したるものなり譯文亦平易明瞭にして遺憾なし著者の原意を發展せり

コメーギス原書
元田作之進先生譯

倫理初歩

定價二十五錢
郵稅四錢

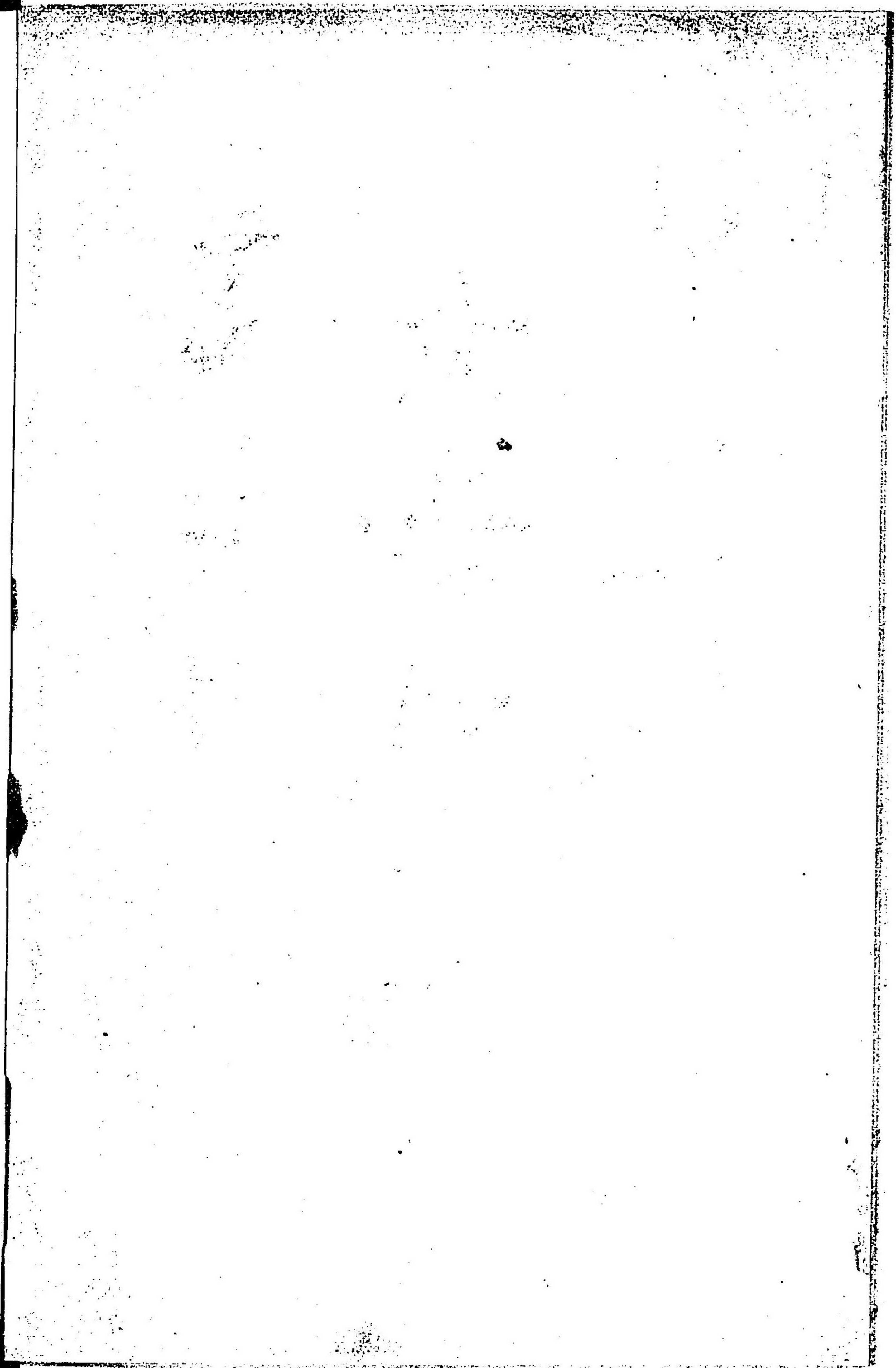
此書は原著者が青年教育の實驗に基けるものにして論旨平易例を擧ぐる適切にして其理論に偏向せざる所確に中等教育參考書の缺所を補ふの價あり

コロンビヤ大學教授フラートン博士原著
立教大學校長元田作之進先生譯

宇宙之心

定價二十錢
郵稅二錢

目次○普通の論證○心の搜索○自然に於ける神○文學の證明○神教か汎神教か○自然に於ける法の支配○物質の無究性と進化○結論等一讀精讀の價値あるべし



1

2

特21

772

求道者と与ふる書
の

国立国会図書館

特

7

020378-000-2

特21-772

求道者の与ふるの書

元田 作之進/著

M42

ABI-0185

